

研 究 紀 要

新島の植物、新島に棲息する哺乳類、両生類、爬虫類

.....新島自然愛好会会長 山本 和夫

新島の植物

(1) 自然の植生について

自然植生とは、まだ人間が住んでいなかった大昔から現在まで、人の手が加わらずに残っている植生です。自然植生には地域の気候、地質などにより、そこに優先して生える植物に違いがあります。沖縄・四国・九州のような温暖多湿な地域に優先して生える樹木は、シイ、カシ、ツバキなど常緑の葉にツヤのある林が優先するので、照葉樹林帯といいます。

伊豆諸島の緯度は、四国、九州とほぼ同じで黒潮の影響を受け、気候が似ているためシイ、ツバキなどの樹木が優先する、照葉樹林帯に属します。

この照葉樹林帯には中層にも、カクレミノ、タイミンタチバナ、モッコクなど半日陰でも生育する植物、さらに下層の林床には、ヤブコウジ、マンリョウ、アオノクマタケランなど日陰を好む植物が生育し、また、林内は湿度も高く着生ランも生育します。

新島の自然植生は、伊豆諸島の他の島とともに、照葉樹林帯に属し、人の住んでいなかった昔から現在に至るまでシイ林が多いのです。シイ林と言ってもスダジイばかりが生えているわけではありません。タブの木やホルトノキ、ツバキや温暖多湿な環境を好む、その他の植物が混生しているのです。それらの植生を含めて照葉樹林と言います。

どんな植物が含まれているのでしょうか。(スダジイ林の植物・表1～4)

また、海岸の風の強い浜辺の砂丘や磯辺には違った植生が発達しています。(磯辺植生表・浜辺の植生表)

(2) 代償植生について

植生は自然環境によって変化してきます。その要因として三つの理由があげられます。

- ① 気候的要因(風、雨、気温など)
- ② 土地的要因(地形、地質、火山、地震など)
- ③ 植生的要因(人間、動物、植物など)

このような要因によって破壊された植生は、放っておいても再び植生がよみがえってきますが、前に生えていた植生とは別の植生になります。その再生した植生を代償植生と言います。

代償植生も、その地域の環境に左右されることは言うまでもありません。代償の植生も新たな破壊要因が加わらなければ、自然環境にマッチする植生に変わっていきます。

自然植生の破壊がひどく裸地になると、いち早く生えてくるのが1年生の草です。メヒシバ、エノコログサ、ハコベ、ツユクサ、などから年を経るにつれて、ヨモギ、ハチジョウススキ、イソギク、チガヤ、ワラビ、ハチジョウイタドリなどの多年草に変わり、さらに年を経てクロマツが入り、オオバヤシャブシ、アカメガシワ、ニオイウツギなどの日当たりを好む落葉樹が生えるようになります。

このようにして生育した林を、二次林といいます。

落葉樹を主体とする二次林も、さらに長い年月を経るに従ってツバキ、ヒメユズリハ、ホルトノキの幼木が芽生えるようになる頃は、はじめに入っているクロマツは成長し、落葉樹の樹冠を越して枝を伸ばすようになります。落葉樹は徐々に勢力を奪われ枯れ死するものが多くなります。

それにつれてツバキ、ヒメユズリハ、スダジイが勢いを伸ばし、やがてもとの照葉樹林に回帰していく運命にあります。

しかし、二次林がもとのように照葉樹林に変化するには、何百年もの年数を要することはいうまでもありません。二次林も次々と破壊が加わればいつまでたっても、もとの植生によみがえることはありません。

(3) 林縁の植物について

林縁は日当たりがよいため、日当たりを好む二次林に生育するような植物が生えます。ニオイウツギ、ハチジョウキブシ、クサギなどの木本類が好んで生え、メダケ、ヘクソカズラ、スイカズラなどがからみつき、人も動物も林内へ入れないほど繁茂します。実は人や動物だけではなく、林内へ吹き込む風を防ぐのに役立っている。この植生のことをマント植生と言います。マントを着せたのと同じ効果があるからです。

災害や人によって、この植生が破壊されると風害や乾燥のため、林は端から枯れはじめ林の内部へ進行していくことになります。

林縁のマント植生は、樹林保護のため大切な植生なのです。

(4) 草地・畑の植物について

樹林が伐採されたり、災害などによって裸地になると、自然に植物がよみがえってきます。また、耕作地を放置した場合も同じくまず生えるのは、1年草の草です。何年かたつと、多年草のヨモギ、チガヤなどの草の中にクロマツ、オオバヤシャブシなどの木本植物も芽生えます。これらの植物は、日向を好む植物たちです。このまま人手も加わらないまま自然に放置すれば、数十年の後には雑木林に変わっていき、二次林となります。

(5) 山地の風衝低木林

新島では山地でも西向きの頂上付近は、特に風の強い場所で草も木も丈が低く、高さ1m前後の低木林となります。そこに生える草も木も特に風に強い植物です。最も風上に生えるのは、ハチジョウススキです。内部に入るに従って丈が高くなり、マルバイヌツゲ、ベンテンツゲ、テリハノイバラ、オオシマツツジ、ヤブツバキなどが混生し、ヒメユズリハ、ミヤマシキミなど混生しながら尾根を越えると樹高は急に高くなり、スダジイが混ざるようになります。

これらの低木林には、アシタバ、ツワブキ、シシガシラなどを伴い、オオミズトンボ、ハチジョウチドリなどのラン類が混生し、また、サクユリなどもよく生える場所です。

海岸・磯辺・岩産の植物

新島の和垂田（ワーダ）の高根から、アジア磯を経て堂丸・若郷の根浮岬から淡井旗城から羽伏磯は岩崖と磯辺とが連続しています。

また、式根島は入り江の多い海岸線に囲まれています。岩崖と磯辺の部分が多い。このような環境であっても植物は生えてきます。ここには、絶えず吹き付ける風や波のしぶきを受ける上に、岩の割れ目や窪みなど狭い容積で生活しなければなりません。他の植物のように広く根を伸ばして水分や養分を吸収することはできません。こうした環境には直根の発達したワダン、ボタンボウフなどがあります。

また、細根の発達したタイトゴメ、イソギク、ハマホラシノブ、オニヤブソテツなどがあります。ハチジョウススキ、イソヤマテンツキなどイネ科や、カヤツリグサ科の植物も岩の割れ目で生活するのに適した根を持っています。

強い乾燥や強風に耐えるには、厚いクチクラ層を持っていたり、根茎に水分を貯えることのできるツワブキ、タイトゴメ、イワタイゲキなどがあります。

式根島の入り江の岩場には、シブキのかかるような岩の割れ目にイソマツが生育し、これらの植物は、いずれも塩害に強い植物でもあります。むしろ塩水が、かかる場所を好む植物です。

海岸砂丘の植物

新島は地質上、東側・西側ともに砂丘が広がり、海岸砂丘植物が発達しています。式根島も小さいながら西側の泊（トマリ）、大浦（オーラ）と東側、石白海岸に浜があります。

砂浜の波の届かなくなるあたりから、コウボウムギが生えはじめます。ついでハマニガナ・ネコノシタが混生してハマヒルガオと続きハマゴウ、ハチジョウススキ、テリハノイバラ、マルバアキグミと内陸部に向かうに従って、木本植物が多くなります。海岸植物は、植物生育にとって大変厳しい場所です。

- ① 風が強い
- ② 砂丘は乾燥しやすい
- ③ 砂が移動するため地表が安定しない
- ④ 日射が強い

などの悪条件が重なるため砂丘植物は、それらの条件に耐えて生き延びなければなりません。そのため、葉が厚くなるクチクラ層が発達します。根は長くなり、1 m～数mの深さにまで及びます。これらの植物の生育によって、地表の移動を止め、波や風雨の侵蝕から砂丘が保護されているのです。

特別保護地区と特定植物群落について

自然公園法に基づく自然公園は、国立公園、国定公園、都道府県立自然公園の3種に分けて指定されています。

自然公園は、景観保護のため保護計画と自然を楽しんでもらうための利用計画があり、そのための一定の行為について規制があります。伊豆諸島は伊豆箱根とともに国立公園に指定されています。規制については環境に応じて次のようなランクづけがなされています。

- ① 特別保護地区 特に嚴重な保護を要する地区、新島では島南東部の白ママ層から、式根島向きの崖線、旗城から淡井浜までの崖線、新島山北東向きの崖線、地内島全域、早島、鶴渡根島全域が指定されています。
- ② 第1種特別地域 特別保護地区に準ずる島特有の植生をとどめている地域であって新島では、宮塚山東側斜面のスダジイ原生林、ワードから堂丸までの海岸線、式根島では高森から平床、釜下、足付、地鉦、三釜湾から西向きの崖線、袴ヶ崎まで指定されています。
- ③ 第2種特別地域 新島山の全域、宮塚山山頂から西側崖地までと、ワード浜、羽伏磯、羽伏浦全域から亀見ヶ森まで、白ママ断層上部からハバタ、丸島山に続く南西向き斜面、ママ下、鳥ヶ島までの海岸、式根島では野伏港西側から泊、大浦、中の浦、神引、唐人津城、隈の井、足地山、大王神社に至る磯辺や樹林帯が指定されています。
- ④ 指定はさらに第3種特別地域、普通地域とに区別されています。

上記の特別指定がなされた理由は、その地域が特定な植物群落を形成しており、保護を要する植生の生育地であるからです。

特別保護地域に指定されている宮塚山東側斜面（腰という。）は現在まで人手が入らず伊豆諸島の極相林の形態を維持している自然林で学術的にも大変価値の高いスダジイ林であるからです。

第1種の指定に入らなかったものの、宮塚山東側の腰のスダジイ林に次いで、自然林の形態を多く残している山は、瀬戸山です。

新島に棲息する哺乳類・両生類・昆虫類

哺乳類

(1) シカ (ホンシュウジカ×ヤクシカ) × (ホンシュウジカ×エゾシカ) の交雑種。

17頭を2回に分けて地内島に放牧したことに由来します。

地内島で繁殖し、頭数が増えたため、海を泳ぎ渡り新島本島でさらに繁殖しつつあります。現在のシカの棲息頭数は調査中で不明ですが、増えていることが予想されています。山地のオオシマカンサゲ、アオキ、カクレミノ、トベラなどがその食害を受け、さらに耕作地の作物などにも影響が及んでいます。人間の一時的な都合によって移入された動物は、いつか必ず人間の手に余るようになります。大島のタイワンリス、三宅島のイタチなどは、そのよい教訓となっています。

やがて島の耕作物や自然の生態系にまで、その影響は及ぶことが考えられます。

(2) コキクガシラコウモリ (コキクガシラコウモリ科)

体長4cmほどの小さな蝙蝠(コウモリ)です。新島では戦時中掘った横穴に40~50前後で生活し、夕方から夜間に穴から飛び出して、昆虫類(蛾、蚊)を捕食しています。伊豆諸島では新島のほか、八丈島に棲息が確認されています。

(3) アカネズミ (ネズミ科)

アカネズミは、固有亜種で大島、新島、神津島に棲息しています。棲息場所は平地から山地の原野の地中に地下道を作り、木の実などのほか昆虫やカタツムリなどを捕食します。人家に入ることもあります。体長12cm内外で背面は黄褐赤色、腹部は白色です。

その他のネズミ

クマネズミ、ドブネズミなど人家に棲息するネズミもいます。

(4) ジネズミ (ジネズミ科)

ジネズミは、伊豆諸島中、新島と式根島に確認されています。鼻がとがっていてモグラに近い仲間です。体長7cmくらい、尾長4cm内外で湿気のある林中の落葉の堆積中や地中、石垣などを利用して生活し、夜間に昆虫、クモなどを捕食しています。本州、四国、九州に分布しています。

シカ以外のこれらの哺乳類がどのように移入してきたのか、詳しいことは不明ですが、ドブネズミやクマネズミなど人家を住家としている種については、船で運ばれる荷物などにまぎれて入ってきたものと思われます。

両生類・爬虫類

ツチガエル・ヒキガエル

カエルも海を渡れないので、もともと島には棲息していなかった動物です。

陸水環境がないことから、わずかツチガエル・ヒキガエルの2種が棲息しているに過ぎません。ツチガエルは昭和30年代になって、小学生の修学旅行が実施されるようになってから、カエルを見たことがない島の子どもたちが田んぼの中や滝が流れる水場からツチガエルを捕まえて島に持ち帰ったことに起因しています。島では住居地の池や集落から離れた水場に集まって産卵し、数を増やしています。ヒキガエルもその後、だれかが島外から持ち込んだものと思われます。今のところ、それほど数は多くありません。

ヘビ

ヘビでは、シマヘビ、アオダイショウが多く棲息しています。シマヘビは色彩の変化が多く、体全体の色が濃く、縞模様のはっきりしない黒っぽいものから、白っぽいものまであり、各島によって、微妙な違いがあることが報告されています。マムシ、ハブなどは棲息しません。

トカゲ

トカゲでは、伊豆諸島固有のオカダトカゲが棲息してミミズや昆虫などを捕食して生活しています。石垣の間や石の下などに穴を掘り、6月に卵を産み、雌は子が孵化するまで食物もとらずに卵を抱えています。

約40日で孵化しますが、メスの体力の消耗は激しく骨と皮のようになり、回復するのが大変で次年の産卵を休むこともあるといわれています。

繁殖力が旺盛であるとはいえないので、保護が必要と思われます。

鳥類

新島・式根島の天然記念物はアカコッコ、イイジマムシクイ、カラスバト、カンムリウミスズメです。

- ① アカコッコ・カラスバトは留鳥ですが、アカコッコは冬に個体数が増加します。主として木の実や虫を食べます。よく地上におりて捕食しているようすが見られます。
- ② カラスバトは、照葉樹林内に生活し、やはり木の実などを食べます。明るいところに出てこないで姿を見ることは稀ですが、島の林の中にはどこでもいます。アカコッコ、カラスバトは式根島にも棲息が確認されています。
- ③ イイジマムシクイは夏鳥として渡ってきて、伊豆諸島で繁殖し、林に棲み虫を食べます。体

色はウグイスに似ていますが、やや緑色が強く、比較して見ないとわかりにくい。さえずりは、ビーチョビ、チョビチョビと鳴き、ウグイスのさえずりと著しい違いがあります。秋から冬は、フィリピン方面で越冬します。

そのほかの新島・式根島の鳥類

天然記念物の鳥のほかに、新島・式根島に生息する伊豆諸島を代表する鳥(固有種)は、どこにでも多いシチトウメジロ(メジロ伊豆諸島亜種)と、有名なオーストンヤマガラよりおそらく少ない希少種のナミエヤマガラ(ヤマガラ伊豆諸島北部亜種)、あとは伊豆諸島固有というわけではありませんが危急種のミサゴ程度です。

ほかに島で住みついている鳥は、海岸ではウミネコ・ウミウ・イソヒヨドリ・クロサギ、林ではホオジロ・ウグイス・シジュウカラ・ヒヨドリ・キジバト・オオコノハズクなどです。トラツグミ・ゴイサギ・カワラヒワ・ノスリも住みついているのかもしれませんが。

しかし、伊豆諸島は南と北を結ぶ鳥の渡りのコースになっていて、渡りの途中で立ち寄る鳥や、冬に避寒に訪れる鳥には、ヤツガシラをはじめ、なんでもありという感じで多くの種類がみられます。危急種のハヤブサは毎冬見られますし、最近でも、希少種だけでコクガンやコハクチョウをはじめ、ハイトカ・セイタカシギ・ツバメチドリなどが訪れました。ウチヤマシマセンニュウもきているようです。また、海鳥のコアホウドリやアオツラカツオドリが島の近くを飛びます。かわつたところでは、巣立ちしてすみかを探しているのか、オオタカ(危急種)やイヌワシ(絶滅危惧種)の幼鳥が訪れました。

そのほかよく見られる鳥は、ツバメをはじめ、海岸にはコサギ・アオサギ・チュウダイサギ・セグロカモメ・イソシギ・アマツバメなど。草原にはアマサギ・チュウサギ・ツグミ・ムクドリ・ハクセキレイなど。林にはアオジ・ヒワ・ウソ・シロハラ・アオバズク・クロツグミなどで、オオルリ・キビタキ・サンコウチョウなども訪れます。

問題のひとつとしては、代表とはいいがたい、給餌に頼ったスズメや、漁村の豊富な生ゴミに頼ったハシブトカラスが多く、そのうえ放鳥したニホンキジが作物を荒らすほどに増えすぎて、いずれもほかの鳥を圧迫しているようです。

昆虫類

環境庁レッドデータブック記載種で島に棲息しているものはいません。伊豆諸島の昆虫には「離島だから違うはず」という先入観からか、かつていろいろなものが亜種としてあつかわれ、その後疑問とされたという経緯があり、古いデータには注意が要ります。

新島はともかく、小さくて環境も一様な式根島には、昆虫の種類は少ないといえます。以下大きくてめだつ昆虫についてふれてみます。

①伊豆諸島らしいものがある。

シキネキマワリ・ミヤケスナゴミムシダマシなどは伊豆諸島にしかいません。

イズアオドウガネ・エリザハンミョウなどは、本州のものとして扱われています。

本州のより、カラスアゲハはきれいなものが多いし、オニヤンマは小さいです。また、ノコギリクワガタ・ミヤマクワガタなどは、かたちや性質が本州のと少し違います。

②定期的に海をわたってくるチョウやトンボがある。

春4月にはウスバキトンボやアサギマダラが姿を見せます。秋10月ころには、ヒメアカタテハ・ツマグロヒョウモン・ウラナミシジミ・イチモンジセセリがふえます。これらは島で繁殖しているものもあるでしょうが、海を渡ってきたものも多いようです。

そのほかウラギンシジミやクロコノマチョウやオオギンヤンマはふつうに海を渡っているようですし、カバマダラやスジグロカバマダラなどが見られたこともあります。

③海浜性のものがある。

オオヒョウタンゴミムシ・ヒョウタンゴミムシ・シロスジコガネ・マダラバッタなど、海浜やその近くに住むものが見られます。

④南方系のものも多く見られます。ガヤカミキリムシは比較的によくしらべられています。

シイにつくベーツヒラタカミキリ、タブにつくホシベニカミキリそのほか、クマゼミ・フタモンウバタマコメツキ・サツマゴキブリ・クチキコオロギ・ヒメクダマキモドキ・オオトモエガなどです。

逆に本州でも北や山に多い、ハンノキカミキリ・オオヘリカメムシ・ミンミンゼミ・ヒグラシなども、宮塚山などで見ることができます。

⑤本州などでとても珍しいというものもとれています。

稀ですが、アカヘリミドリタマムシ・アシマダラアカサシガメなどがとれています。

⑥そのほかにもめだつものがあります。

チョウ・ガでは、モンキアゲハ・オナガミズアオ・シンジュサン・アケビコノハなど、

トンボでは、ヤブヤンマ・クロスジギンヤンマなど、

ハチでは、オオモンツチバチなどのツチバチ類や、ヒメスズメバチなど、

そのほかトノサマバッタ・ニホントビナナフシ・ツノトンボなど、

これらが比較的大型の、目につくとか印象が強い昆虫です。

合弁花群



和名 ヒメムカシヨギ
学名 *Erigeron canadensis*
分類 キク科

北米原産の2年生の帰化植物。明治の始めに入り日本全土に広がっている。ゴイシグサ、ヨガワリグサ、テツドウグサなど各地で呼ばれている。オオアレチノギクと同じ環境に生え、耕作地のやっかいものになっている。花は夏～秋。種子に冠毛があり風で飛ぶ。



和名 オオアレチノギク
学名 *Erigeron sumatrensis*
分類 キク科

日当たりのよい原野、畑、土手などに生える2年草の帰化植物。南米原産、世界の暖温熱帯に広く分布。日本に入ったのは明治の始め。新島ではカンゴン草（官軍草の意）といい、帰化の年代をよく現している。高さ80～180cmになる。花期は夏～秋。種子は冠毛がある。



和名 ハチジョウアキノキリンソウ
学名 *S. virga-aurea* var. *praeflorens*
分類 キク科

ミヤマアキノキリンソウに近縁の伊豆諸島準固有種。丈は15～30cm。葉は茎の下部ほど卵形上部は披針形となる。葉は厚く光沢がある。花は秋～冬。茎の上部の葉腋から分枝した枝先に黄色の頭上花をつける。伊豆諸島から小笠原諸島に至る海岸、草地に生育。



和名 ワダン
学名 *Crepidiastrum platyphyllum*
分類 キク科

西日本から台湾に分布するホソバワダンに近縁の伊豆諸島固有種。ワダンは葉の幅が広く、円頭で質厚く総苞内片は5個で花序は密。茎は太く分枝して大株となる。秋に基部から分枝した枝先に黄色の頭状花をつける。全体無毛で粉白色を帯び、切ると白い汁液を出す。



和名 イソギク

学名 *Chrysanthemum pacificum*

分類 キク科

本州中部高地に分布するイワインチンに由来する伊豆諸島固有種。四国の海岸のシオギク、紀伊半島のキノクニシオギクとも近縁種。花は秋で頂上に群って黄色の頭上花をつける。花冠は舌状花を欠く。海岸から山の上まで生える。栽培菊と自然交配するので絶滅を危惧する。



和名 ヘクソカズラ

学名 *Paederia scandens*

分類 アカネ科

草藪や林縁などに生える落葉のつる性落葉の多年草。茎は左巻きで他物に巻きついて長くのびる。葉は柄があり対生する。夏に葉腋に花茎をのばし数個の鐘状灰白色で内面紅紫色の小花をつける。果実は球形で黄色に熟す。全体にちぎると悪臭がある。



和名 ハリナスビ

学名 *Solanum sisymbriifolium*

分類 ナス科

あぜ道や土手などに生える1年草の帰化植物。茎は50～100cmくらいになり長短不同の刺と毛を密生する。葉は互生し柄があり羽状に深裂する。葉柄、葉脈にも刺がある。花は夏で上部の節間から出た花枝に数個つき白色。花柄にも刺。果実は球形で刺のあるがく苞に包まれている。



和名 オオムラサキシキブ

学名 *Callicarpa japonica*

分類 クマツヅラ科

本州南部、四国、九州、朝鮮、琉球、台湾に分布。主に海岸近くに生える落葉低木。島では海岸から山の頂上まで自生している。葉は対生し楕円形で細かいきょ歯がある。夏に腋生集散花序を出し淡紫の花をつける。秋、赤紫色の果実を群ってつけ美しい。



和名 グンバイヒルガオ

学名 *Ipomoea pes-caprae*

分類 ヒルガオ科

四国、九州、琉球など温熱帯の海岸砂地に生える多年草。茎はつる性で長く砂上をはって繁殖する。葉は柄があり互生する。夏から秋に葉腋から花柄を出しロート状の紅紫色の花を咲かせる。がくは緑色で5つに裂ける。雄しべ5、雌しべ1。さく果は黒い。



和名 ハマネナシカズラ

学名 *Cuscuta chienensis*

分類 ヒルガオ科

暖地の海岸に生育するつる性の寄生植物。ハマゴウの枝にからみついて寄生する。茎は細長く黄色で糸状。魚網のくずを捨ててあるように見える。夏から秋に茎の上部に白色で鐘状の小花を数個つける。がくは5裂し、花冠は鐘形で先は5裂する。雄しべも5。



和名 ソナレセンブリ

学名 *Swertia noguchiana*

分類 リンドウ科

1968年に伊豆須崎で発見された海岸岩礁地に生える1~2年草。ソナレムグラやタイトゴメなどと混生して葉茎の形態がソナレムグラによく似ており花がつかなければ区別できないほどである。分布が極限され更に個体数が極めて少ないので絶滅が危惧される。



和名 イソマツ

学名 *Limonium wrightii*

分類 イソマツ科

南部の暖地海岸に生える小低木状の多年草。式根島の磯先に自生している。茎は枝分かれし古い茎は松の幹のようにひびわれる。葉は茎の上部に群がってつき硬くてへら状。花は8~9月葉の間から花茎を枝分かれさせ、筒状濃紫色の花を咲かせる。



和名 マンリョウ

学名 *Ardisia crenata*

分類 ヤブコウジ科

本州中部以西の樹林内の林床に生える常緑低木。茎は直立し高さ30~60cm、時には1m以上のももある。夏に枝の先に白色の柄のある小花を数個つける。がくは花冠と共に5つに裂ける。果実は柄があり大豆よりやや小さい球形で赤くなる。正月飾りに使う。



和名 シャシャンボ

学名 *Vaccinium bracteatum*

分類 ツツジ科

低地の常緑林中に生える常緑の中高木で高さ5mくらいになる。葉は短い柄があり、なめらかで厚い。初夏に葉腋から花穂を出し、柄のある白色の花を片側に並べてつける。花冠は鐘状でがくは緑色、花冠と共に5裂する。雄しべは10。液果は黒紫色に熟し鳥が好んで食す。

シダ類



和名 カニクサ

学名 *Lygodium japonicum*

分類 カニクサ科

関東以西の山野に見られるつる性のシダ。根茎は横にはう。つるは針金状で羽片を互生しながら他にからみついでのびる。上部の羽片の縁に胞子のう群をつける。胞子のうをつけた葉は更に細かに羽状分裂することがある。



和名 エダウチホングウシダ

学名 *Lindsaea chienii Ching*

分類 ホングウシダ科

山の崖や林縁の湿り気のある所に生え短くはう根茎から数枚の葉を出す。葉は20～35cm、葉柄は下部が濃褐色、上部は淡くなり光沢がある。葉は卵状長三角形。上部は1回羽状複葉、下部は2回羽状複葉となる。胞子のうは上縁につき縁に平行に外向きに開いた包膜をもつ。



和名 コシダ

学名 *Dicranopteris pedata*

分類 ウラジロ科

やや乾燥した日当たりのよい所に生える。根茎は長く地中をはい、まばらに葉を出す。葉は高さ80～120cmくらいになり、葉は栗褐色で堅く平滑。そこから左右斜下向きに1枚ずつ羽片が出る。さらにその先はまた二股になる。下面は白色。



和名 イワガネソウ

学名 *Coniogramme japonica*

分類 ホウライシダ科

林内の窪地などの湿り気のある所に生える常緑性のシダ。羽片は上部へ次第に細まり先端は尖る。側脈は軸に近い下部の所々で結合し網目状になる。胞子のう群は所々で網目になり列の先端に達することが多い。イワガネゼンマイに似るが葉の形など違う。



和名 ノコギリヘラシダ

学名 *Depasium tomitaroanum*

分類 メシダ科

ヘラシダとナチシケシダとの雑種であるとされ、極めて珍しく固体数も少ない希少種である。生育地は新島の他には三宅島～八丈島。伊豆、紀伊半島の一部。九州西部、四国南部の一部、種子島～八重山列島の一部であるが、生育範囲は限られており固体数は極めて少ない。



和名 ヒメノキシノブ

学名 *Lepisarus onoei*

分類 ウラボシ科

林内の樹木の幹や岩上につく常緑のシダ。根茎は細長く匍匐し葉をまばらに出す。葉身は長さ3～10cmくらい、線形で先端近くが最も幅広く凹頭でへら状になる。胞子のうは群は中間から辺縁寄につく。ノキシノブに似るが本種より大型で葉の先は細まり尖る。



和名 キジノオシダ

学名 *Plagiogyria japonica*

分類 キジノオシダ科

暖帯の山林に生える常緑性のシダ。根茎は塊状、葉は60cmくらいになり単羽状。羽片の基部は上側では葉軸に沿着する。胞子葉は栄養葉とは別に後から出て高くなり1mにもなる。上部に細い羽片を出し下面に胞子のうをつける。

単子葉群



和名 アオノクマタケラン

学名 *Alpinia intermedia*

分類 ショウガ科

常緑樹林の林床に生える常緑の多年草。分布は暖帯南部で利島以南の伊豆諸島、紀伊半島、四国、九州、琉球、台湾で、利島は分布の北限。葉身は長楕円形、無毛で光沢がある。花は7月で白く唇弁に紅紫色の斑点がある。果実は大豆くらいの球形で冬になると赤く熟す。



和名 ゲットウ

学名 *Alpinia speciosa*

分類 ショウガ科

九州南部から琉球、印度に分布する熱帯多年生植物。三宅島、八丈島、小笠原にも生育している。新島が北限。茎は叢生し2～3mの高さになり葉は大きく紙状で光沢がある。7月の頂部から房状の総状花を垂下させ光沢のある美しい花を咲かせる。下部から順次開花。



和名 ヒガンバナ

学名 *Lycorie radiata*

分類 ヒガンバナ科

道端、土手などに生える多年草。鱗茎が地下にあり、秋に葉の出ない前に30cmくらいの花茎を出し、その先に真っ赤な花を数個輪状に横向きに咲かせる。花被は6片で細長く反り返る。種子はできない。花後、深緑色の細長い葉を数枚叢生するが翌春には枯れる。



和名 スカシユリ

学名 *Lilium maculatum*

分類 ユリ科

海岸の砂地、崖に自生する。地中の鱗茎から茎を出し30～60cmくらいになる。葉は多数互生し披針形で柄はない。葉脈は縦に平行し鋭頭で光沢がある。花は6～8月、頂部に1～3個の花を真上に向けて橙色で褐色の斑点が点在する花を開く。花片の基部は細い柄となる。



和名 サルトリイバラ

学名 *Smilax China*

分類 ユリ科

山野に生えるつる性の落葉低木。地下茎は硬く屈曲しひげ根を出す。茎は硬く光沢があり、まばらに刺があるものとないものがある。葉柄は短く巻きひげを出す。葉は円形で光沢がある。花は4～5月。果実は大豆くらいで秋から冬にかけて赤く熟し生花の材料に使われる。



和名 ノギラン

学名 *Meianartheicum luteo-viride*

分類 ユリ科

山地の日当たりのよい草地、土手などに生える多年草。根茎は短く直立。葉は根生し黄緑色で光沢がある。夏、葉の中心から花茎を出し上部を分枝して総状花序を出し淡黄色の小花を多数つける。短い花柄のもとに長短2枚の苞葉がある。花被片6で縁は白色。



和名 メヒシバ

学名 *Digitaria adscendens*

分類 イネ科

荒地、道端、畑などに生える一年草。根本から数本の茎を周囲にひろげ細長い茎は節があり軟らかい葉を互生させる。葉の下部は葉鞘となり白毛がある。地上をはう茎の節から根を出しはびこる。茎の頂に花序の枝を放射状に出す。庭や畑にはびこるやっかいもの。



和名 ハチジョウススキ

学名 *Miscanthum condensatus*

分類 イネ科

本州のトキワススキが伊豆諸島で分化した伊豆諸島準固有種。葉舌に縁毛がなく全体大型である。高さは1.5~2mに達し太く、葉は幅1.5~4cm、上面は無毛、下面は粉白色。海岸の岩崖地、風衝地に密生し、内陸の低木林の防風に役立つと共に海岸の浸蝕崩落防止に役立つ。



和名 キンエノコロ

学名 *Setaria Intescens*

分類 イネ科

原野、田畑、畦道などに生える一年草。茎は基部で分枝して束生して直立し細長く平滑葉は互生し葉鞘には稜がある。夏茎の頂上に円柱状の穂を出し多数の花を密着させる。枝穂は2小穂、小穂には1花がつく。短梗の基部に黄金色の剛毛が多数でる。



和名 カゴメラン

学名 *Goodyera Matsumurana*

分類 ラン科

暖地の樹林の林床に生える常緑多年草。葉は卵形-卵状楕円形。暗緑色で白色網目の模様がある。花は10~11月、長さ2~4cmの花序に密につく。苞は狭披針形で尖り縁にまばらな短毛がある。萼片は長楕円形、長さ2.5cm、唇弁は卵形。分布は伊豆諸島、屋久島から台湾。



和名 アオキ

学名 *Aucuba japonica*

分類 ミズキ科

常緑林の下に生える常緑の中低木。2mくらいになる。雌雄異種。葉は対生で厚く光沢がある。幹も緑色で光沢がある。春に枝の先に花穂を出し紫褐色の小さな4弁の花をつける。雄花は雄しべ4、雌花には雌しべ1。黒実は卵形でうずら豆大、冬に赤く熟し美しい。



和名 アレチマツヨイグサ

学名 *Oenothera biennis*

分類 アカバナ科

北米原産の2年生帰化植物。茎は高さ30～120cm。斜上した毛がある。根生葉は柄があり、鋭頭多数の鋸歯がある。茎上の葉は柄が短く先は尖る。夏上部の葉腋から1個ずつの無柄の花を咲かせる。花弁は4で黄色、先端中央は少し窪んでいる。萼は4。萼の下は筒状。



和名 ハチジョウキブシ

学名 *S. praecox* var *matsuzaki*

分類 キブシ科

キブシの伊豆諸島型固有亜種で房総、三浦、伊豆半島南部海岸にも分布する。葉も大きく長楕円状卵形で質が厚く両面無毛、光沢がある。枝も太く、花序も8～15cmと長い。果実も倒卵形で大きい。花は早春新葉に先立ち穂状花序を下向きに垂れる。雌雄異種。



和名 アツバスマレ

学名 *V. mandshurica* var *triangularis*

分類 スミレ科

千島～九州、中国に広く分布するスミレの海岸型と思われる。全体の形態は本州産に類似しているが、アツバスマレは葉が厚く表面の光沢が強く、葉形は幅の広いものが多い。千葉県南部から伊豆諸島、屋久島、種子島に至る太平洋側にのみ見られる海岸型固有亜種。



和名 ホルトノキ

学名 *Elaeocarpus decipiens*

分類 ホルトノキ科

房州以西の暖地に生える常緑樹でスタジイ林の中に混生している高木。葉は柄があり互生し光沢がある。常時赤い葉を混じている。初夏、葉腋に長い柄の総状花序を出し、白色小花をつける。花弁5、萼片5、雄しべ多数、核果は卵形ピーナッツ大、黒青色で野鳥が好む。



和名 ヤブガラシ

学名 *Cayratia japonica*

分類 ブドウ科

林縁や原野に生えるつる性の多年草。地下茎は地中でのび、茎は葉に対生する巻きひげを他のものからませでのびる。夏に葉と対生して花柄を出し、淡緑色の小花を群がってつける。花弁4、雄しべ4、雌しべ1、花盤は淡紅色。やぶを覆い隠すほど繁茂し、やぶを枯らす。



和名 クロガネモチ

学名 *liex rotunda*

分類 モチノキ科

関東以西の暖地の常緑林の中に生える常緑樹。高さ10mくらい。葉は長い柄があり互生し革質で毛はなくなめらか。雌雄異種で春に上部の葉腋から短い柄を分け、淡紫色の単性花をつける。実は7mmくらいの球形で赤くなる。モチノキは1本の果柄に1個の実をつけることで区別。



和名 コミカンソウ

学名 *Phyllanthus Urinaria*

分類 トウダイグサ科

暖地の畑、庭などに生える一年草。茎は直立し10~30cmになる。葉は枝に二列に並んで互生し短い柄がある。夏から秋に葉腋から赤褐色の雌花と雄花をつける。雄花は萼6雄しべ3、雌花は子房1さく果は枝の下にぶら下がり赤褐色で3つに裂ける。



和名 エノキグサ

学名 *Acalypha australis*

分類 トウダイグサ科

道端や畑などに生える一年草。茎は直立し30cmくらいになる。葉には柄があり互生し毛がある。夏から秋に上部の葉腋から柄のある花序を出す。雄花は多数で赤褐色、萼は4つに裂け雄しべ8。雌花は萼が3裂。子房は球形で毛がある。葉はエノキに似ている。



和名 コニシキソウ

学名 *Euphorbia supina*

分類 トウダイグサ科

畑、庭、道端に生える一年草。茎は地をはいよく枝分かれし白い毛がある。葉は対生し中央に暗紫の斑点がある。茎は葉を切ると白い汁が出る。夏から秋にかけて葉腋に小さな花序をつける。汚れたような紅色である。ニシキソウに似ているが葉に斑点がない。



和名 ジャケツイバラ

学名 *Caesalpinia sepiaria var japonica*

分類 マメ科

山野、林内に生えるつる性の落葉木。長くのびて幹の太いものは8cmにもなる。多く分枝して鋭いかぎ状の刺がある。他の木にはい上がり樹上に繁る。初夏、上部小枝の先に30cmくらいの総状花序を出し左右相称の黄色い花を咲かせる。花卉5、莢に豆果ができる。有毒植物。



和名 クズ

学名 *Pueraria Thunbergiana*

分類 マメ科

各地の山野、草地に生えるつる性の多年草。茎は長さ10 cm以上、葉は長い枝があり3枚複葉で毛があり互生する。秋、葉腋に花序を出し、赤褐色の蝶形花をつけ、下から咲き始める。萼は淡紫色。莢に褐色の毛がある。根は肥大し葛粉をとり食用、薬用にする。



和名 ミソナオシ

学名 *Desmodium caudatum*

分類 マメ科

中部以西の山地や道端に生える小型の木で、茎は直立して分枝し、高さ1 m近くになる。葉は互生し長い柄があり、下面に短い毛がある。夏に枝先の葉腋から花軸を出し穂状の花序をつけ、蝶形の小花を開く。秋、莢に入った種子ができる。莢にはが形の毛があり衣服に着く。



和名 ハウロクイチゴ

学名 *Rubus Sieboldi*

分類 バラ科

中部以西の海岸に近い山地に生える常緑低木。茎は弓状に曲がり枝を出す。枝には刺があり、若い枝には短毛がある。葉は円形で長い柄があり互生する。5月、葉腋に数個の花をつける。花は白色5弁、萼片は赤味を帯び5枚あり、毛がある。核果は球形で、冬に赤く熟す。



和名 ラセイタタマアジサイ

学名 *Hydrangea involucrata*

分類 ユキノシタ科

暖地の山地の湿った所に生える落葉低木。幹は下から分枝し1.5 mくらいになる。若枝は淡緑色で毛を密生する。古い樹皮は褐色となりはげ落ちる。葉は対生、長い柄があり、楕円形で長さ30 cmにもなる。葉脈は毛があり、葉脈は細か窪んでしわになる。花は8~9月。



和名 ハマナデシコ

学名 *Dianthus japonicus*

分類 ナデシコ科

暖地の海岸近くの草地に生える多年草。茎は数本束生し、高さ20~50 cmくらいになる。葉は下部は大きく重なり、上部は小さくなり短い柄があり対生する。夏に頂部に集散花序を出し、紅紫色の花を多数つける。萼は筒状で先は5裂し、花弁は5、雄しべ10、花柱2。

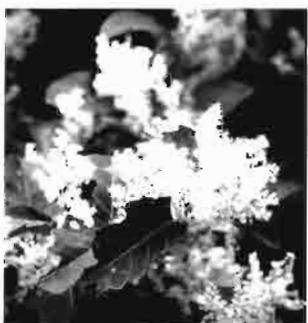


和名 アメリカヤマゴボウ

学名 *Phytolacca americana*

分類 ヤマゴボウ科

荒地や道端などに野生化している多年草の帰化植物。根は肥大し、茎は太く直立し紅紫色で無毛、高さ1～2m。葉は柄があり互生、無毛。夏から秋に茎の上部側方から総状花序を出し、下垂させ白色の小花をつける。花弁はない。秋に小豆大の実をつけ黒紫色に熟す。



和名 ハチジョウイタドリ

学名 *P. cuspidatum var terminalis*

分類 タデ科

イタドリの伊豆諸島型準固有種。葉は大きく厚く硬い。両面無毛で光沢があり、広卵形、茎は太く節間は短い。花期は7月で茎の上部に固まってつく。火山裸地や海岸砂地などに、他の植物に先だって生える強健な種である。雌雄異種である。



和名 フウトウカズラ

学名 *Piper kadsura*

分類 コショウ科

中部以南の海岸近くの林の林床に生える常緑のつる性の植物。茎は暗緑色で心形の葉を互生し、節から根を出し、葡萄してのび、また地のものにはい上がる。雌雄異種。夏葉に対生する黄色の穂状花序を垂下し、細かい花を密着。液果は冬に赤く熟し、つぶすと香りがある。



和名 スダジイ

学名 *C. cuspidata var Sieboldii*

分類 ブナ科

暖帯から熱帯に優占する常緑高木。伊豆諸島ではスダジイの樹林が多く、タブノキやホルトノキを混生する極相林となる。花は5月。穂状花序を新枝の葉腋から出し黄白色の雄花を多数つけ、雌花は下部の葉腋から出る。ドングリは2cmくらいで黒褐色になり莢から落ちる。